夢見る乙女の作り方

漫珠沙華

夢見る乙女の朝は早い。

起床は午前六時。スマホのアラームとともに、ベッドから起き上がる。ぐずぐずせずに、カーテンを開いて朝の日光を浴びる。

なんて言ったって、今日は待ちに待ったデートの日だ。寝坊して遅刻だなんてできない。

顔を洗ってタオルで拭けば、もう大丈夫。

フライパンをコンロに置いて、電源を入れる。もちろん換気扇も忘れない。フライパンを温めている間に、オーブントースターで食パンを焼く。温まったフライパンに油をひいて、冷蔵庫にあったハーフベーコンを二枚。じゅう、という音がした。すかさず卵を割ってその上に落とす。蓋をあとは待つだけ。

チン！　トースターが完成を知らせる。一人暮らしの朝は慌ただしい。パンを取り出しバターを冷蔵庫から引っ張り出す。適量は難しい。しょっちゅう失敗する。少しずつ少しずつバターナイフで塗るしかない。

「え、あ！」

そうじてもたもたしていると、目玉焼きが焦げてしまう。あわてて火を止め、蓋を開ける。

「あちゃ〜」

目玉焼きは半熟が正義である。――もっとも、彼女にとっては、だが。

さて、目の前にある目玉焼きは完熟のようだ。

「仕方ないか」

火を止める。フライパンとベーコンの間にフライ返しを差し込んで、そのまま滑るりとフライパンの上を滑らせるようにしてトーストの上にのせる。塩コショウを振れば――完成！

今日の朝食は、ベーコンエッグトースト。見栄え・栄養的にはレタスも欲しいが、それは今度。

「いただきます」

夕べは軽めにすませてしまったので、お腹が空いている。そのまま彼の隣を歩くわけにもいかない。彼の前では、いつだって完璧に近い自分でありたいから。

上の目玉焼きがこぼれないように気をつけて、そのままかぶりつく。ベーコンはカリカリ、トーストはふわふわ。ほどよい塩味が口の中に広がった。

「あ」

そして幸運なことに、卵は完熟ではなかった。黄身の外側は固まっていたが、中身は無事だ。トロトロのオレンジ色が、白身に映えている。

私って、幸せ者だ。

トーストにかぶりつく。塩味がほどよい塩梅で効いていたので、手が止まらない。ものの数分であっという間に平らげてしまった。

バターなどで汚れた手を洗って、冷蔵庫を開ける。トースト一枚では、少し物足りない。

中を見回した先にあった、ソレ。手に取って引きずり出す。

「ヨーグルト！　あと、いちごジャム」

さっそく深めの皿を取り出して、スプーンでヨーグルトをよそう。いちごジャムも忘れない。純白に、真っ赤な飾りつけが綺麗だ。スプーンで掬って一口食べれば、ヨーグルトの酸味とジャムの甘味が絶妙なハーモニーを奏でる。あっという間に皿一杯分を食べ終えた。食器とフライパンは一旦水に浸けておく。

食事を終えたら、すぐ歯を磨く。しっかり、しっかり。歯垢はミリもナノもミクロも許されない。

三分きっちり磨いて水でゆすいだあとで、次は昨夜のうちに決めておいた服に着替える。散々悩んで叩き出した、愛らしくもあり隙がなく、機能的な組み合わせ。

花柄のブラウスにフレアパンツ。ハートを模したネックレスと腕時計をつければ、彼女流のデート服は完成する。全身鏡を覗き込むと、不安そうな自分の姿。

かわいすぎないだろうか。

それでも、これしかない。少しでも彼に好きだと思ってもらえるように。

鏡の中の自分は、きっと眉をつりあげた。

次はメイク。日焼け止めは顔、首に満遍なく。普段はやらないマスカラもチークもして、今日のために新しく買ったラメを使ってみる。きっと彼はいつもと違うことには気づいても、何が違うのかはわからないだろう。

最後に髪。あまり長さのない髪のアレンジを探すのは苦労した。横髪を少し残して編み込み、耳の後ろでとめる。ストレートアイロンを使って髪をウェーブにすれば、完成だ。ワックスで髪をかためるのも忘れない。

準備がすっかり終わったので、時間を見る。バスの時間までまだ余裕はあるが、もう家を出ることにした。

お気に入りのバッグを手に取る。財布とスマホ、ハンカチなどの持ち物がしっかり揃っていることを確認して、ビジューローファーを履く。

「いってきます！」

棚でじっと見守っているぬいぐるみたちに告げる。

――おう、しっかり楽しんで来いよ。
そんな声が聞こえた気がした。
鍵をしっかり閉めて、バス停に歩く。太陽が燦々と照っているが、風があるので暑くはない。アスファルト、横断歩道、信号機。いつも見るなんてことのないものたちがどこか輝いて見える。今にも浮いてしまいそうな足と口角を抑えて歩くのが精一杯だった。
予定より一本前のバスが既に停まっていたので、それに乗ることにした。中は、休日にしてはだいぶ空いている。隣にバッグを置いて、二人分の席を一人で使う。
イヤホンを耳にさして、お気に入りのプレイリストをランダム再生する。友人にオススメしてもらった、恋愛の楽曲ばかりだ。片想い、両想い、お別れ、愛の覚悟。様々な詞が音楽とともに脳内を駆け回る。
しばらくして駅に着いた。時計を見れば、待ち合わせ時刻の30分前。
どうやって時間を潰すか考えながら、待ち合わせ場所の銅像に近づく。
駅を行きかう人々の中で、頭一つ抜けた人物に気づいた。彼もちょうどこちらを見つめている。
急に照れ臭くなってしまって、こんにちは、と声をかけた。
――おう、こんにちは。
彼も視線のやりどころがないようだ。
早いね、まだ三十分も前だよ、と腕時計を見た。
――た、たまたまだよ。
そっぽを向いたが、何かを決意したようにこちらを向いて、口を開いた。
――早く、会いたくて。
とすんと音がした。また、恋に落ちた。
思わず微笑んだ。私もだよ、なんて言って、ふたりで歩き出す。手を繋ぐのは、まだ恥ずかしい。指先から熱が伝わってしまって、溶けてしまうかもしれない。
学校での出来事、共通の友人、話題は尽きない。喉の渇きも忘れて、たくさん、たくさん話した。メッセージアプリを使ったり電話もしたりしたけれど、彼が目の前にいると楽しくなってしまう。二人きりの空間で話す機会はなかなか巡ってこないので。
デートはノープラン。駅を歩いて、気になったところに入ってみる、の繰り返し。
あそこ気になる、と店を指させば、じゃあ入ってみるかと返って来た。雑貨屋でも、どこでも。さすがにレディースの服屋に入ったら、居心地が悪そうに、そろりそろりと周囲を見回していた。
――その服、似合いそうだな。

え？　と振り返る。リボンのついたワンピース。手に取ってみたはいいものの、自分には可愛すぎるだろうと戻そうとしていたのだ。
私には可愛すぎるよ、と苦笑いした。
――かわいくていいだろ。
思わず、きゅっとハンガーを握りしめた。
――ずっと言うタイミング逃してたけど、今日の服装、すげえかわいい。
彼はそれだけ言うと、顔をそらした。短い髪からのぞく首筋が真っ赤になっている。
ありがとう、とこぼした。サイズ確認のために、試着室に入ってみる。ブラウスとズボンを脱いで、フェイスカバーをつけてワンピースを着てみる。サイズはジャスト。股下も問題ないし、しっかり自分の体型に合っている。鏡を見ると、耳まで真っ赤にした少女がこちらを見つめていた。
やっぱり、少し恥ずかしい。
なおさら熱を持った頬を手で扇いで冷まして、鳴りやまぬ鼓動を深呼吸で落ち着かせる。
試着室のカーテンから顔だけ出した。
――サイズ、どうだった？
ジャストでした、と伝えると、彼は口元をその大きな手で覆って少しだけ視線をこちらからそらした。
――もう、脱いじゃいました？
いいえまだです、と敬語で応じる。
――できればでいいんだが、見てみたくて。
そんなこと言われたら、羞恥は捨てるしかない。カーテンを開けた。
どうかな、似合ってるかな。そう尋ねてみる。
――似合ってる。すげえかわいい。
でれでれと溶けてしまいそうな表情を抑えるのに必死だった。ありがとう！　じゃあ買っちゃうねとカーテンを閉め、着替えて会計を済ませた。
腕時計を見れば、お昼どき。
――そろそろどっかで飯でも食うか？
奇遇！　思わずまばたき。
休日の飲食店はどこも混んでいて、一番空いているカフェでもいくらか待つ必要があった。入口においてあるバインダーに名前と人数を書いて、しばらく待つ。
その間、会話はなかった。けれども心地よい。
ふと視線が交わる。そんな偶然でも心があたたまって、思わず笑ってしまった。
――なんかあったか。
なんでもない、ちょっと嬉しかっただけ。
そう返すと、彼もそうか、なんて言って。

ちょうどいいタイミングで、店員が来た。人数を伝えて、案内してもらう。窓が大きく、自然光をたっぷり中に取り入れている。観葉植物もいくつか置かれており、おしゃれな雰囲気だ。ファミレスでたまにいる、駆け回る子供も姦しい女性もいない。

席について、荷物を降ろす。メニューを開くと、とたんにぐうと腹が鳴った。

朝はしっかり食べてきたんだけどね。

――何食べたんだ？

ベーコンと目玉焼き、トースト。あとはヨーグルトにいちごのジャムかけて食べたかな。そっちは？

――白米と、味噌汁。わかめと豆腐の。あと卵焼き食べた。

彼の卵焼きは甘いのか、しょっぱいのか、どちらだろう。そう考えながらメニューをめくっていく。これとこれが美味しそうじゃないか、コーヒーもつけちゃおうか。こうやって悩んで話す時間が一番楽しい。意見を求めているわけではないのだ。

頼むものをすっかり決めて、「すみませ～ん」と店員を呼びつけ、注文した。お冷で手汗を冷やしながら、料理を待つ。その間もたくさん喋ったり、何も喋らなかったりした。彼は全くスマホを弄らないで、こちらの話に相槌をうってくれた。

料理は見栄えも味もよかった。ただ一つだけ、うっかり写真を撮り忘れてしまったことを除けば最高だった。

店を出て、美味しかったねなんて笑い合う。そこからぐるぐる色んなところを歩いて、笑って、手を繋いでみて。腕時計を見れば、もうすぐ解散の時間だ。

――あー、その。

彼は繋ぎっぱなしだった手を、少しだけ強く握った。薄い唇が言うべき言葉を探して、はく、はくと開閉を繰り返す。

――もうちょっとだけ、一緒にいてえんだけど。

たまに素直じゃない彼の言葉に、目を見開いた。同年代の男子よりも大人びて見える彼がこうしてわがままを言うのはまれだ。

けれども、約束は約束で、時間は時間。背伸びをして、項垂れる彼の頭に手を伸ばした。髪が柔らかい。大型犬のようだと思った。

またデートしようね。

――ん。

眉間に皺が寄っている。一応納得はしたようで、手を離した。

じゃあね、またね、と手を振る。彼は名残惜しそうに振り返りながら、人ごみに消えていった。

「さて、私も帰りますか」

呟いて、踵を返す。夢見る時間はもう終わりで、魔法は解

けるし、シンデレラの舞踏会も永遠ではない。
　けれども、彼が「かわいい」と言ってくれたワンピースは、確かにこのショッピングバッグに入っている。今は、それでいい。

<完>